

井伊英理 DenshiOn



<http://www.thereimin.org/>

ロシアで発明された世界最古の電子楽器テルミンを使用した作品で、日本の楽曲をカバーしたものは今回が初めてです。これらの美しい名曲を、メロディーはシンセサイザーの父・ボブモーグ博士の遺作となった Etherwave Pro テルミンで、伴奏は moog ソフトウェア・シンセサイザーで完成させました。そのサウンドはトミタサウンドを髣髴させレトロでテクノなアルバムです。テルミンのひとり二重奏・四重奏を行うのはひじょうに難しいもので聞きどころのひとつです。テルミン・ファン、モーグ・シンセサイザー・ファンの皆様にも、ぜひ聞いていただきたい作品です。

収録曲：作曲家

浜辺の歌：	成田 為三
波浮の港：	中山 普平
上を向いて歩こう：	中村 八大
モスラ：	伊福部 昭
砂 山：	中山 普平
花の街：	團 伊玖磨
さくら：	日本古謡
てんさくの花：	沖縄民謡
新日本紀行：	富田 勲



録音に使用されたテルミンと、設計をしたボブモーグ博士



Leon Theremin demonstrates his invention, c. 1928
Photo: collection of Thomas Kline

世界初の電子楽器を発明したレフテルミン博士

作曲家：解説

□ 浜辺の歌：成田 為三

成田 為三（なりた ためぞう、明治26年（1893年）12月15日 - 昭和20年（1945年）10月29日）は、秋田県出身の作曲家。大正3年（1914年）、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に入学。山田耕祐に教えを受け、大正5年（1916年）に『浜辺の歌』を作曲している。大正6年（1917年）に同校を卒業。卒業後は九州の佐賀師範学校の義務教生をつとめたが、作曲活動が続けるため東京市の赤坂小学校の訓導となる。同時期に『赤い鳥』誌に多くの作品を発表する。大正11年（1922年）にドイツに留学。留学中は当時ドイツ作曲界の元老と言われるロベルト・カーン教授に師事。大正15年（1926年）に帰国した昭和17年（1942年）に国立音楽学校の教授となる。

□ 波浮の港：中山 晋平

中山 晋平（なかやま しんぺい、1887年（明治20年）3月22日 - 1952年（昭和27年）12月30日）は作曲家。長野県下高井郡日野村（現・中野市）出身。多くの傑作といわれる童謡・流行歌・新民謡などを残した。1908年（明治41年）、東京音楽学校予科入学。翌1909年（明治42年）、本科のピアノ科に入る。1912年（明治45年）、梁田貞らと東京音楽学校本科卒業。東京都浅草の千束小学校音楽専科教員となる傍ら作曲を行う。島村抱月が松井須磨子らと旗揚げした「芸術座」に参画し、1914年（大正3年）トルストイ『復活』公演の劇中歌『カチューシャの唄』を作曲。1920年（大正9年）からは野口雨情と組んで『金の船』から多くの童謡を発表した。他方、「新民謡」（創作民謡）にも力を注ぎ、野口雨情や西条八十、北原白秋等の作詞による、多くの曲を作った。

□ 上を向いて歩こう：中村 八大

中村 八大（なかむら はちだい、1931年1月20日 - 1992年6月10日）は、中国青島出身の作曲家・ジャズピアニスト。『上を向いて歩こう』、『明日があるさ』など、1950年代末から1960年代にかけての数々のヒット曲で知られる。学生時代からピアニストとして活動。その活躍ぶりが、当時早稲田大学のベーシストだった渡辺晋（後の渡辺プロダクション創業者）の耳にも届き、早稲田大学文学部に進学後対面。渡辺が結成していたコンボイバンドに加入した。1953年からはドラマーのジョージ川口率いるカルテットのメンバーとなり、当時の日本における大衆的ジャズブームの渦中で非常に人気を得た。その後、1950年代末からは作曲家としての活動に主軸を転じ、ジャズのセンスを生かした特異な作風で、それまでの日本の歌謡曲とは一線を画したユニークな歌曲を多く作った。永六輔とのコンビで多くのヒット作を世に送り出したことから、『六・八コンビ』と呼ばれる（『上を向いて歩こう』など二人の歌をしばしば歌った歌手の坂本九を合わせて、『六・八・九』と呼ばれることもある）。井伊英理はテルミン演奏により作詞の永六輔氏よりお礼の書状をいただく事になる。

□ モスラ：伊福部 昭

伊福部 昭（いふくべ あきら、1914年5月31日・2006年2月8日）は、日本を代表する作曲家。ほぼ独学で作曲家となった。日本の音楽らしさを追求した民族主義的な力強さが特徴の数多くのオーケストラ曲のほか、『ゴジラ』を初めとする映画音楽の作曲家として、また音楽教育者として知られる。映画「モスラ」・「モスラ対ゴジラ」のエンドタイトルとして書き下ろされたこの楽曲は怪獣映画のタイトルと思えない美しい旋律である。テルミンは一人二重奏をおこなっている。

□ 砂山：中山 晋平

「波浮の港」を参照

□ 花の街：團 伊玖磨

團 伊玖磨（だん いくま、1924年4月7日 - 2001年5月17日）は、日本を代表するクラシック音楽の作曲家であり、エッセイストでもある。東京に生まれ、日中文化交流協会主催の親善旅行で中国旅行中、心不全のため蘇州市の病院で逝去。オペラ、交響曲、管弦楽作品、室内楽曲、合唱曲、吹奏楽、映画音楽・放送音楽、童謡、校歌等多岐にわたり作曲を手がけた。

□ さくら：日本古謡

日本古謡と表記される場合が多いが、実際は幕末、江戸で子供用の箏の手ほどき曲として作られたもの（作者不明）。もともと「咲いた桜」という歌詞がついていた。その優美なメロディから明治以降、歌として一般に広まり、現在の歌詞が付けられたものである。日本の代表的な歌として国際的な場面で歌われることも多い。

□ てんさぐの花：沖縄民謡

沖縄民謡

沖縄を代表する教訓唄。「ていんさぐぬ花」とはホウセンカのこと、鑑賞用として庭園に栽培。花の色は紅、桃、白。（ていんさぐの花は爪先に染めて、親の教えは心に染めなさい）という意味。以下、心を磨きなさい、親を大事にしなさい、誠意をもってあたりなさい。何事も努力が大事と諭すように歌っている。かつて、沖縄では女の子がていんさぐの花を取り、それをつついた汁を爪先に塗って遊んでたそうです。このてんさぐの花は装飾用としてだけでなく、魔よけの意味もあったようです。赤は悪魔の目を潰す魔よけになると考えられ、娘達の身を守る術としての風習があったと伝えられていた。メロディーそのものが歌いやすく老若男女をとわず県民に深く愛唱されている。

□ 新日本紀行：富田 勲

富田勲（とみた いさお、1932年4月22日 - ）は日本の作曲家、編曲家、シンセサイザーアーティストの第一人者として知られる。新日本紀行は、1963年10月7日から1982年3月10日に放送されたNHK総合テレビの番組。18年半続いた番組で、制作本数は計793本にのぼる。オリジナルの新日本紀行はオーケストラによる生演奏であり富田版シンセサイザーの録音は存在していない。テルミンの一人四重奏を含めた全編モーグシンセサイザーによる録音は今回が初めての試みである。